

専門機関未利用者の発達障害Web サイト閲覧のプロセス

新納, あんり
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/7177904>

出版情報 : 九州大学総合臨床心理研究. 15, pp.57-62, 2024-03-15. Center for Clinical Psychology and Human Development, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



専門機関未利用者の発達障害 Web サイト閲覧のプロセス

新納あんり 九州大学大学院人間環境学研究院

要約

本研究は発達障害に関する悩みを持つが専門機関への相談経験のない青年期において、発達障害に関する情報 Web サイトを閲覧した際の影響を明らかにすることで Web サイトの有用性や課題点を把握することを目的とし、調査を行った。方法としては、20代10名を対象に半構造化面接を実施し、複線経路・等至性モデル (TEM) を用いて質的分析を行なった。専門機関未利用の閲覧者は、自己理解を求めて発達障害 Web サイトを閲覧する中で、発達障害の曖昧さ理解、自身の特性理解や他の障害者に対する態度変容、新たなニーズの発生といった変化が見られた。また、変化に影響を与えたインターネットの有用性として、情報の多様さから発達障害の曖昧さに気づきやすいこと、周囲と共有しにくい特性に関する情報を得やすいことが挙げられた。一方、発達障害 web サイトの課題点として、閲覧者のみの判断で誤った発達障害に関する認識や理解がなされる危険性、信頼性の高いサイトが閲覧されない危険性が示唆された。今後は量的な検討、発達障害 web サイト利用によるネガティブな影響の研究が必要である。

キーワード：発達障害、インターネット、複線経路・等至性モデル (TEM)

問題と目的

発達障害に関連する悩みは、周りに知られることへの抵抗感 (成田ら, 2019) が壁となることで、必要な支援を得られにくい。そのような中で、必要な情報を得る機会を構築する可能性があるものとして Web サイトの閲覧がある。シュレンベル (2020) は、うつ病患者を対象としたインターネット情報閲覧の研究において、インターネットの利用によって援助要請行動が一時的に促進される可能性を指摘した。うつ病においては、援助要請の観点からの研究がされている。しかし発達障害に着目した場合、社会場面での困り感の解決がニーズとして挙げられることが予想される。社会場面での困り感については具体的な対処を知ることで解決可能な課題も多いことから、援助要請のみではなく情報を得られることでニーズを満たすことにつながりやすいことが考えられる。また、紀 (2020) は、インターネットの情報取得は援助要請を行わない場合でも Web サイト上の情報自体が困りごとの自己解決につながる重要性を明らかにしている。しかし実際に Web サイト上のどのような情報が閲覧者にどのような影響を及ぼしているのかについては明らかになっていない。閲覧者により肯定的な効果をもたらす情報を提供するためにも現時点での Web サイトの情報が与える影響についての検討が必要である。

発達障害 Web サイトに関する研究は Web サイト自体の情報が専門的な知見として信頼できるかといった信頼性の観点から研究がなされてきたが (Reichow et al., 2012, 2013)、保護者を対象にした研究 (Grant et al., 2016; 船木ら, 2020) からは信頼性ではなく実際の支援方法や支援先といった実用性が重視されることが明らかになっている。つまり、信頼性だけでは Web サイトの実際の閲覧には繋がらないため、信頼性が高くかつ閲覧につながるような情報や性質を持った、適切性の高い Web サイト作成が必要である。そのため、閲覧につながるために、閲覧者のニーズや閲覧時の Web サイト選択の傾向を調査することが求められる。また、これらの先行研究は保護者を対象としたものであり、閲覧者自身が発達障害に関連する困り感を持つ場合に Web サイトに対してどのような情報を求めるかといったニーズについては明らかになっていない。特に青年期の発達障害者は自己理解を深めていく時期であるとされており

(篠田, 2008)、自身について向き合っていく中で実用性とは異なるニーズが生じることが考えられる。そのため、青年期における発達障害に関連する困り感等を抱えている閲覧者のもつ発達障害 Web サイトに対するニーズについて検討を行う必要がある。

また、同じ「青年期における発達障害に関連する困り感等を抱えている閲覧者」でも、専門機関へ相談していない場合、専門的なアドバイスを得られにくいことから、自身の判断で情報の取捨選択が行われている可能性がある。現に、閲覧者が既に相談にかかっている場合、Web サイトで得られた情報は専門家からの指導に対して補足的に閲覧されることが明らかとなっている (Thapa et al., 2020) が、専門家の指導がない場合は Web サイトが主要な情報として扱われると考えられるため誤った情報を入手・理解する危険が高い。このような危険を持つ閲覧者が、発達障害 Web サイトを閲覧した際に、発達障害や自身のことをどのように捉えるのかを明らかにするためにも、専門機関に相談を行うのではなく自身のニーズに応じて Web サイトを使用した閲覧者に焦点を当てていくこととする。

本研究の目的は、発達障害に関係する困りごとのある当事者が発達障害に関する Web サイトを閲覧する時のニーズと閲覧後の気持ち・認識・行動の変化のプロセスを分析することによって、Web サイトの情報や性質が閲覧者に与える影響を明らかにし、発達障害 Web サイトの有用性や課題点を検討することとする。その際に、閲覧時の Web サイト選択の傾向から、Web サイトの適切性について検討する。また今回は発達障害に関する悩みを持つ青年期の閲覧者に焦点を当てていく。

方法

1. 対象

専門機関等への継続的な相談経験がなく、自身のことで発達障害に関する関心を持ち、Web サイトを利用した経験のある20代10名 A~J (男性4名、女性6名、 $M = 25.7, SD = 1.85$) を対象に調査を行なった。調査協力者の具体的なプロフィールは表1に示す。

2. 手続き

スクリーニング調査を実施後、質問紙とインタビューによる

表 1. 協力者プロフィール

	性別	年齢	職業
A	女	23	学生
B	女	27	社会人
C	男	25	社会人
D	女	29	社会人
E	男	25	社会人
F	男	23	社会人
G	女	24	社会人
H	女	24	社会人
I	男	24	学生
J	女	23	学生

調査を行なった。調査は協力者の希望により、全てオンラインで行った。まず、精神的健康度が臨床域にある場合は除外とするためにスクリーニングを行い、対象となる協力者に後日連絡を行った。スクリーニングに協力した場合、対象とならなかった場合にも希望に応じて研究結果を送付することとした。

3. スクリーニング

質問紙は①自身のことについて発達障害について関心があり Web サイト利用を行ったか、②専門機関への継続的な相談経験があるかの質問項目に加え、精神的健康度のスクリーニングに用いられる K10 (Kessler, 2002; 日本語版: 古川, 2003) によって構成された。

4. 質問紙

UPI-RS, ADHD・ASD 困り感質問紙短縮統合版 (山崎, 2012) と自由記述による質問項目で構成された。自由記述で回答を求めた具体的な質問項目は、①何を知りたいと思って検索したか、②使用した検索キーワードは何か、③どのような情報を得たか (実際に得た情報は何か、情報を選択する際に重視した点は何か、閲覧した Web サイトの「属性 (政府, 大学, 商用など)」は何か、利用していて利用しやすいと感じた点や利用しにくいと感じた点は何か、「情報を信頼できるか」については重視したか)、④どのような変化が生じたか (気持ちの変化はあったか、自身や発達障害に対する認識の変化はあったか、日常生活で工夫する等の行動面での変化はあったか) であった。

5. 分析

分析には複線径路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model: TEM) を用いた。TEM とは、個々人が多様な経験をしながらも (複線径路)、最終的に類似した結果にたどり着く (等至性) という考え方である (安田, 2005)。TEM による分析の特徴として、個々人が体験したプロセスを非可逆的時間の流れの中で分析をすることが可能な点がある (安田・サトウ, 2012)。本研究においても利用者が利用しようと思った時点でのニーズや、そこから発達障害 Web サイトを利用し変化していく径路は個々人によって多様であるが、Web サイト利用によって変化がなされるという 1 つの結果にたどり着いていると捉えられる。また、この時間の流れの変化には外界や環境の影響が作用していることも重視される (安田他, 2006)。利用者が時間的枠組みの中で変化していく過程において、外界・環境からの影響である発達障害 Web サイトの要因がある。発達障害 Web サイトが個々人の変化に与える影響についても明らかにするためにも TEM を用いることが適切である。さらに、TEM は対象者の人

数によって異なる質の記述が可能である。安田・サトウ (2012) によると、1 人では個人の径路の深み、 4 ± 1 人では径路の多様性、 9 ± 2 人で径路の類型把握が可能になるとされている。本研究では、発達障害 Web サイトのニーズとその後の変化についてどのようなパターンがあるかを把握するために 9 ± 2 人を採用した。

6. 倫理的配慮

本研究は第一著者の所属する研究施設内の倫理審査委員会の承認を得て調査を実施した (研究許可番号: 21004)。

結果

1. TEM 図の作成

TEM による分析結果を TEM 図に表した (図 1)。等至点、必須通過点、社会的ガイドを表 2 のように設定した。また、閲覧のプロセスは閲覧前、閲覧中、閲覧後の時期に分けられた。

2. 閲覧前

閲覧前の経緯やニーズは質問項目のうち①何を知りたいと思って検索したかによって明らかになった。ほとんどの閲覧者が自身が発達障害に当てはまるか知りたいというニーズの元検索が行われていたが、ニーズの背景は様々であった。具体的には、①「発達障害だとしたら将来大変かもしれない」といった当てはまることに対する不安 (A, D, J)、②「当てはまることで困っていたことへの理由が分かって安心すると思ったから」といった困っていることへの気持ちへの対処 (B, G, H, J)、③「単純な興味として当てはまるか知りたいと思った」といった関心 (C, D)、また、自身の特性と思われるものについて困っていないが、発達障害そのものに対しても興味を持ち、「障害についての知識を深めたい (F, I)」という動機の場合もあった。困り感やうまくいかなさをから生じたネガティブな思いを納得することで解消したい気持ちが強い閲覧者がいる (A, B, D, G, H, J) 一方で、C, D, F, I は発達障害であるかの不安感 は低いが関心を持って検索を行っていた。

加えて、「自身も当てはまれば、発達障害のある方への理解が深まって支援に繋がれるのではないかな (D)」, 「困っていたことへの対処法を知りたかった (H)」といった語りが得られた。自分自身の困り感との付き合い方や同様の困り感を持つ他者への関わり方といった現実的な対処についても知りたいというニーズも語られた (D, H)。

3. 閲覧中

閲覧中のプロセスは質問項目の②使用した検索キーワードは何か、③どのような情報を得たか (実際に得た情報は何か、情報を選択する際に重視した点は何か、閲覧した Web サイトの「属性 (政府, 大学, 商用など)」は何か、利用していて利用しやすいと感じた点や利用しにくいと感じた点は何か、「情報を信頼できるか」については重視したか) から明らかになった。

まず、②使用した検索キーワードは何かについては、閲覧者がニーズに応じて検索をしていく際には、自身が当てはまると感じた障害種 (発達障害, ADHD 等) に加え、「チェックリスト」, 「特徴」, 自身に当てはまる内容等をキーワードとして併用しながら検索を行っていた。さらに、障害種を入力した際に候補欄に「チェックリスト」が出てきたため、その流れで使った場合も見られた。

③どのような情報を得たかの質問については、情報の選択の

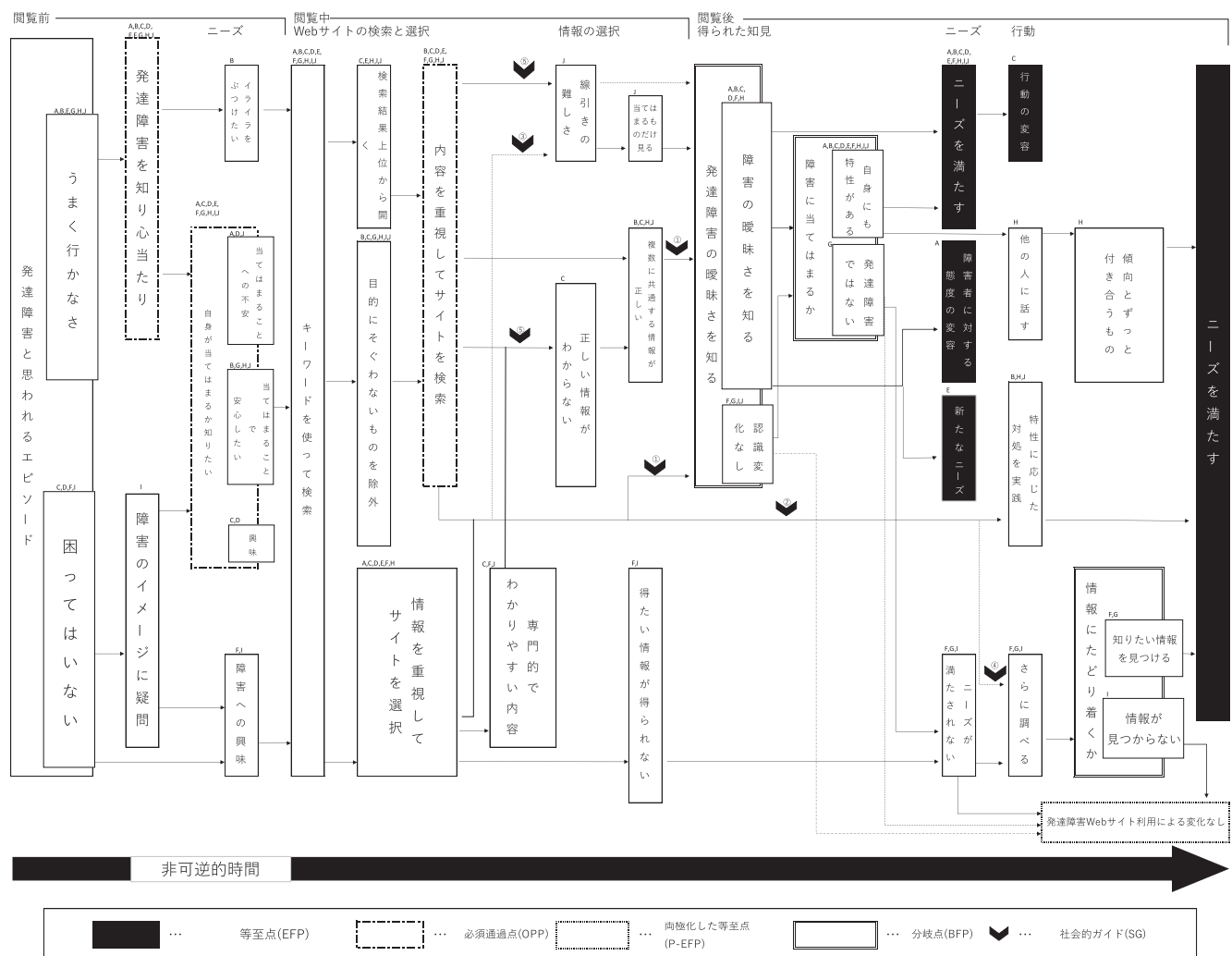


図 1. 発達障害 Web サイト閲覧プロセスの TEM 図

表 2. TEM の用語と本研究での位置付け

用語	意味	本研究での位置付け
等至点 (EFP)	多様な経路が一旦収束する点	発達障害 Web サイト利用による変化あり ①ニーズを満たす ②行動の変容 ③発達障害者に対する態度の変容 ④新たなニーズ
両極化した等至点 (P-EFP)	等至点とは対となる収束をした点	発達障害 Web サイト利用による変化なし
分岐点 (BFP)	等至点への分岐となる点	①発達障害の曖昧さを知る ②障害に当てはまるか ③情報にたどり着くか
必須通過点 (OPP)	ほとんどの人が経験をした点	①発達障害を知り、心当たり ②実際に当てはまるか知りたい ③内容を重視してサイトを選択
社会的ガイド (SG), 社会的方向づけ (SD)	等至点や両極化した等至点に影響を及ぼすような環境要因・文化的な力	①障害に関する情報 ②対処法 ③但し書き ④他の障害の情報 ⑤情報の多さ、内容の違い

仕方や実際に得られた情報について語られた。検索結果として表示されたものを選択していく際には、検索結果上位に表示されたものから目的に沿わないものは見ないように除外して閲覧していた。Jは「自分が本当は軽度のものとは思いつつ、ADHD と思いたかったから、正規のサイトを見て違う可能性の方が高まることを避けた。正規のサイトを選ばないことで、ADHD と断定させるのではなく可能性で留めておきたかった。」という理由で政府のサイトを避けていた。Web サイトの選択時には、信頼性を重視しているのは半数に満たず、サイトの内容が閲覧者にとって魅力的な内容か否かがサイトを選ぶ要因となっていた。Bは「文章が上手くて面白そうだったから」という理由で Web サイトを選択していた。また、「箇条書きで綺麗なデザイン」、「端的なイラスト」、「空白が多くて見やすい」等の見た目が Web サイト選択の要因になっていた。さらに、「チェックリストも多いとモチベーションに繋がらない (D)」、「国が書いたものは文字ばかりだと思うので読まない (E)」と語る閲覧者もいた。

Web サイトで得られた情報としては主に①障害に関する情報、②対処法、③但し書き、④発達障害以外の可能性の4点があげられた。これらの情報に加えて、ネット上の情報の多さやサイトによって内容が異なっていたことが語られた。このように多くの情報がある中で、Jは「ADHD の特徴が全部当てはまるわけではなかったが、当てはまるところだけを見てしまっていた」と語った。

さらに、発達障害そのものに対しても興味を持ち、その知識を深めることが動機の閲覧者は、得ようと思っていた情報に辿り着けない体験をした (F, I)。Iは「ちっちゃい頃から同じような遊びをするみたいな感じにしか書かれてなかったけど、知りたかったのは遊びを一日のうちに何時間すればそう呼べるのかとか、細かいこと」と語った。

4. 閲覧後

④どのような変化が生じたか (気持ちの変化はあったか、自身や発達障害に対する認識の変化はあったか、日常生活で工夫する等の行動面での変化はあったか) の質問項目から、閲覧後の変化について語られた。発達障害 Web サイトを閲覧した後の変化について、G 以外の閲覧者は発達障害の曖昧さに触れていた。具体的には「医療機関に受診したりとかちゃんと然るべきところに行ったりとかはどこからなんだろうなっていうところは難しく曖昧なラインなんだな (A)」といった診断に関する具体的なラインの曖昧さ、「障害はあるかないかの2択ではなく程度の問題 (E)」等が語られた。そのような曖昧さについて触れた後、自身が発達障害であると断定することはなく、「可能性」であることが語られた。

発達障害に関する不安を覚えていた閲覧者からは、不安が解消され安心につながったことが語られた。「コミュニケーションが苦手な人が多い (C)」と同様の悩みを持った他者が多く存在すること等の情報が不安の解消につながっていた。

Web サイト閲覧後に行動自体が前向きに変化した場合も見られた。Cは「コミュニケーションが必要な場に積極的に参加するようになった」と語っていた。加えて、Web サイト閲覧時のニーズとは異なる変化についても語られた。Aは他の発達障害者に対する態度が変容したこと、Eは他者にも自身のことを理解して欲しいと感じるようになったことを語った。また、心境だけではなくその後の行動にも変化が見られた。インターネッ

トに掲載されているものや、自分自身で考えた特性への対処を行うことでさらに変化へと繋がっていた。「工夫することで (中略)、小さな成功体験の積み重ねが自信に繋がった (H)」のように特性に対する対処によって困っていたことが解消されていた。

一方、G, Iは検索したものの解決に至らなかったと語った。Gは「チェックをしてみて、あんまり該当する部分がなく、結果としては自分は発達障害じゃないとわかったため安心には繋がらなかった」ことを語った。また、Iは知りたいものを知ることができなかったと語っている。

このように情報に辿り着けなかった場合や、発達障害に当てはまることで安心を得たいというニーズが満たされなかった場合はさらに調べていた。Gは「HSP・アダルトチルドレンについて調べて、むしろアダルトチルドレンに当てはまると思い、安心できた。」と語った。Fは、「気になっていた大人の ADHD に関することが見出しに書いてあるページを選択し」、知りたかった情報に辿り着いていた。一方、さらに調べても得たい情報に辿り着けなかったことも語られた。Iは専門書等でも改めて調べたが「少なくとも僕は調べられてないような気がする」と語った。

考察

1. 閲覧前のニーズに対する閲覧後の認識・気持ち・行動の変化

検索時のニーズの中では「自身が発達障害に当てはまるか知りたい」、「発達障害について学びたい」ことが語られた。これらは保護者を対象とした先行研究 (Grant et al., 2016) とは異なるニーズであり、自己理解の一助として発達障害 Web サイトを利用していることが示唆された。そのようなニーズがある中で、Web サイト上の情報を通して発達障害の曖昧さ (黒木, 2015) を学ぶことで、自身が発達障害であると断定することなく、自身の特性を振り返り自己理解を深めることが可能になったと考えられる。

発達障害であるかどうかに対して不安を抱いていた閲覧者は、同様の特性を持つ存在を知ることによって不安の解消が可能になること、困り感に応じた対処をすることで心境が肯定的なものに変化しうることが明らかになった。発達障害についての情報を得ることによって、自身が苦手であると感じていた場面に対しても積極的に参加することが可能になったことも示唆された。

しかし、発達障害そのものについて学びたいというニーズを語った F, Iは情報への辿りにくさについて語っており、発達障害であるか知りたいというニーズと比較してニーズの満たされにくさがある可能性も見られた。Fは情報に辿り着けた一方でIは情報に辿り着くことができなかった。インターネット上の情報利用についてはデジタルデバイドの存在が指摘されており (Park et al., 2016)、格差を埋めるため、より詳細な情報に辿り着けるような経路を示すことが有効であると考えられる。

さらに、ニーズによらない変化として、発達障害について知ることによって他の発達障害者に対する態度変容、新たなニーズの発生があることが明らかになった。新たなニーズとしては、「他の人にも発達障害を理解してほしい」ことが語られたが、Web サイトは検索された場合にしか閲覧されないため、これまで関心を持っていなかった層にも発達障害の情報を届けることが困難である。そのため、閲覧者が検索するきっかけとなっていた SNS

等の他のツールを使って発達障害に対して関心を持ってもらう必要がある。

一方、発達障害に当てはまらなかった場合は、他に自身の特徴と当てはまる疾患等を見つけることで納得に繋がっていた。発達障害に当てはまらなかった閲覧者が自身の困り感等について理解ができるよう、他の類似した特徴を持つ疾患等との比較が可能な情報の提示が必要である。加えて、発達障害の基準が曖昧であるため（黒木、2015）、自身が発達障害であるかわからずニーズを満たされなかった場合も見られた。発達障害について検索する閲覧者の中には、ASD の特性を持つ者もあると考えられる。ASD の特性として曖昧さを理解する苦しさがあることから（Frith, 1989）、特性に応じた具体的な説明が必要である。

2. 閲覧中における情報選択時の傾向と Web サイトの適切性

閲覧者がどのように情報を選択していくのかについては、キーワードによる検索、Web サイトの選択、情報の選択の段階ごとに特徴が見られた。キーワードについては、障害種のみでなく多様な条件で検索が行われているため発達障害 Web サイトの調査を行う際には、検索キーワードの設定も閲覧者が使用するキーワードを元に調査を行う必要があることや、キーワード入力時の候補として出てくる単語が閲覧者のリテラシーレベルを補填している可能性が窺えた。Web サイトの選択段階では、実際の閲覧では信頼性が高いとされている政府のサイト（Reichow et al, 2013）は閲覧されず、Web サイトの内容が重視されており、先行研究（Grant et al, 2016）と一致していた。信頼性の高い Web サイトが閲覧されるためには閲覧者が魅力的だと評価する文章であること、デザインが見易いこと、イラストがあること、チェックリストが閲覧可能な項目数であること、一般的な用語で書かれたわかりやすい内容であることを抑えた Web サイトを作成する必要がある。情報の選択段階では、専門機関未利用の場合、閲覧者が自身の都合に合わせて情報を誤認する危険性が示唆された。また、閲覧者は複数のサイトから正しいと思える情報を選択している。以上より適切性の高い Web サイトを作成するにあたっては情報の信頼性が高いことに加え、①閲覧者の求める内容であること、②閲覧者が内容を理解しやすいこと、③閲覧者が魅力的と思えるようなデザインであることを踏まえたサイトが複数作成されるべきであろう。

3. Web サイトの有用性と課題点

専門機関未利用の場合、自己理解に繋がる情報を求めて発達障害 Web サイトを閲覧することによって、様々な変化が生じていることが明らかになった。これは、専門機関の利用に限らず、情報提供という Web サイトの機能及び、そもそもとしての Web サイトの性質が発達障害に関連する困り感等を持つものに対して変化をもたらし、閲覧者を支援することが可能になったことを示している。特に発達障害に関連する悩み等を抱えていた時に、自身に対する不安を持ちつつも発達障害に当てはまるか知りたい、発達障害について知りたいというニーズのもとで検索を開始する。その過程で発達障害に関する情報を得て発達障害の曖昧さについて学んでいくことで、ある程度発達障害と特徴が一致すると考えられた場合には発達障害であるかどうかを断定することはなく可能性として自身の特性として受け入れるようになり、困っていることに対しても前向きに取り組むような側面や、他の発達障害者に対する態度の変容、新たなニーズの発生が変化として見られた。また、そのような変化に影響

を与えたインターネットの有用性としては、ネット上の情報の多様さから発達障害の曖昧さに気づきやすくなっていたこと、周囲と共有しにくいと考えられる発達障害の特性について、インターネットを通して同じような特性を持つ他者の存在に関する情報を得やすいことが挙げられた。

一方で発達障害 Web サイトの課題点も明らかとなった。まず、専門機関未利用の場合には閲覧者のみの判断で誤った認識や理解がなされる危険があること、信頼性の高いサイトが閲覧されない危険があることが明らかとなった。信頼性の高いサイトが閲覧されるよう、内容面を工夫した Web サイトを複数作成する必要がある。特に ASD の傾向がある場合には、特性に応じた具体的な情報の提示も必要となってくる。そして内容をわかりやすくした上で、さらに発達障害について詳細に知りたいというニーズや自身が何に当てはまるのか知りたいというニーズに対応できるように、発達障害に関する詳細な情報や他の類似した特性のある疾患等へのアクセスの仕方についても Web サイト内で提示しておく必要がある。さらに、発達障害 Web サイトへのアクセスに繋がるように、SNS 等で発達障害について発信していくことも支援の幅の広がりやニーズを満たしていく上で重要であると考えられる。

4. 今後の課題

今後の課題としては、以下の点が挙げられる。1 点目は実際に得られた Web サイト上の情報についての調査が不十分であった点である。本研究では、インタビュー調査で得られた語りからのみで、Web サイトの具体的な記述、属性については「覚えていない」と回答する者がほとんどであった。今後は、実際の Web サイトを提示しつつ、得られた効果について量的に検討していく必要がある。2 点目は、発達障害 Web サイトの閲覧によるネガティブな変化の考慮である。インタビューにおいて、発達障害 Web サイトを閲覧したことでネガティブな影響を受けたことは特に語られなかったが、ネガティブな影響を受けている可能性もある。特に信頼性を考慮せずに情報取得をした場合は、不適切な情報取得によるネガティブな影響も予測される。Web サイト閲覧によるポジティブな影響のみに着目するのではなく、Web サイトの要因による両側面の影響について慎重に検討していくべきである。

〈付記〉

本稿は2021年に九州大学大学院人間環境学府専門職学位課程実践臨床心理学専攻に提出した修士論文の一部に加筆・修正を加えたものです。調査にご協力いただきました方々、本論文を執筆するにあたりご指導いただいた金子周平先生に心より御礼申し上げます。

文献

- Frith, U (1989). Autism: Explaining the enigma. Oxford, UK: Basil Blackwell. (ウタ・フリス・富田真紀・清水康夫（訳）（1991）. 自閉症の謎を解き明かす. 東京書籍.)
- 船木友美・岩隈美穂（2020）. Web サイトによる健康情報探索行動の過程と要因：未就学児の保護者を対象とした質的研究. 日本保健医療行動科学会雑誌, 35 (1), 63-71.
- 古川壽亮・大野裕・宇田英典・中根允文（2003）. 一般人口中の精神疾患の簡便なスクリーニングに関する研究. 平成14年度厚生労働科学研究費補助金（厚生労働科学特別研究事業）心の健康問題と対策基盤の実態に

関する研究 研究協力報告書.

- Grant, N · Rodger, S · Hoffmann, T (2016). Intervention decision-making processes and information preferences of parents of children with autism spectrum disorders. *Child: Care, Health and Development*, 42, 125-134.
- Kessler, R. C., Andrews, G., Colpe, L. J., Hiripi, E., Mroczek, D. K., Normand, S. L., Walters, E. E., & Zaslavsky, A. M. (2002). Short screening scales to monitor population prevalences and trends in non-specific psychological distress. *Psychol Med*. 2002 Aug; 32 (6): 959-76. doi: 10.1017/s0033291702006074. PMID: 12214795.
- 黒木俊秀 (2015). 発達障害の疑問に答える. 慶應義塾大学出版会.
- 紀日奈子 (2020). 大学生の困りごとに関するインターネット情報行動について: 利益とコストの予期に着目して. 九州産業大学大学院臨床心理センター臨床心理学論集, (15), 31-39.
- 成田奈緒子・星野常夫・八藤俊忠・小野里美帆・谷口清 (2019). 大学生における特別支援ニーズと抑うつレベルの関連. 教育学部紀要, 53, 195-205.
- Reichow, B., Halpern, J. I., Steinhoff, T. B., Letsinger, N., Naples, A., & Volkmar, F. R. (2012). Characteristics and quality of autism websites. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 42, 1263-1274.
- Reichow B, Shefcyk A, Bruder MB. (2013). Quality comparison of websites related to developmental disabilities. *Research in Developmental Disabilities*, 34, 3077-3083.

- Park, E., Kim, H., & Steinhoff, A. (2016). Health-related internet use by informal caregivers of children and adolescents: an integrative literature review. *Journal of medical Internet research*, 18 (3), e57.
- シュレンベル・レナ (2020). うつ病に対するインターネットを介した情報提供による援助要請の促進可能性. *心理臨床学研究*, 37 (6), 599-609.
- 篠田晴男・石井正博 (2008). 青年期における自己理解の深度化と対人関係性について: 高機能広汎性発達障害の青年期支援に向けて.
- Thapa, D. K., Visentin, D. C., Kornhaber, R., West, S., & Cleary, M. (2021). The influence of online health information on health decisions: A systematic review. *Patient education and counseling*, 104 (4), 770-784.
- 山崎勇・高橋知音・岩渕未紗・小田佳代子・徳吉清香・金子稔 (2012). UPI-RS, ADHD・ASD 困り感質問紙の短縮統合版の試作. *CAMPUS HEALTH*, 49 (3), 67-72.
- 安田裕子 (2005). 不妊という経験を通じた自己の問い直し過程 治療では子どもが授からなかった当事者の選択岐路から. *質的心理学研究*, 4 (1), 201-226.
- 安田裕子・木戸彩恵・高田沙織 (2006). 複線径路・等至性モデル 人生径路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して. *質的心理学研究*, 5 (1), 255-275.
- 安田裕子・サウトツツヤ (2012). TEM でわかる人生の径路 質的研究の新展開.

Usefulness of and issues with browsing websites dedicated to developmental disabilities on non-users of consultation organizations

Anri NIIRO

Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

This study aimed to examine the usefulness of and issues with websites on developmental disabilities by clarifying the impact of these websites on adolescent visitors who have concerns about developmental disabilities but have never approached a consultation organization. Ten subjects in their 20s were interviewed, and qualitative analysis was conducted using the trajectory equifinality model (TEM). Viewers seeking self-understanding began to understand the ambiguities regarding developmental disabilities while browsing these websites. Their understanding of their own characteristics and attitudes toward other people with disabilities changed, and they acquired new needs. Additionally, the diversity of information on the Internet made it easier for them to recognize the ambiguities within developmental disabilities and to obtain information about characteristics that they found difficult to share with others. However, issues that need to be addressed by websites on developmental disabilities include misidentification and misunderstanding based on the viewer's judgment alone and browsing unreliable websites. More research and quantitative studies are needed on the negative effects of using websites on developmental disabilities.

Keywords: Developmental Disorders, Internet, Trajectory Equifinality Model (TEM)